

第2章 高鳳蓮初期の剪紙-2

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

酉年に、高鳳蓮は多くの鶏を剪りましたが、それは単純な鶏の形ではなく、人々に崇高な鳥である吉祥の鳳凰を連想させます。

紙面いっぱい羽を広げ風を受けてはばたくそれらの鶏の剪紙は大きさも程よく、窓飾りとして貼っても、また持ち歩いて人にあげたり交換したりにも便利です。

「母鶏と雛」の剪紙は、巢で卵を抱いている雌鶏で、身を縮め風邪を通さないようにしている紙面の鶏には高鳳蓮の母心が溢れています。卵を抱きながらも、母鶏は、活力に満ち、首を挙げて胸を張り誇らしげです。

雄鶏は時を告げ、雌鶏は卵を産んで、山に住む人びとの生活は鶏たちと密接に結びついています。高鳳蓮は言います。「鶏は不思議な力を持っています。夜が明けるのを真っ先に知るのには鶏で、雄鶏が鳴くと太陽が顔を出し、目の前に光が満ち満ちて来ます」。

雄鶏は、雄々しく勇ましく、意気軒高として、自分の縄張りの中を飛ぶように歩き回り、まるで皇帝のように、縄張りの中に他の雄が入り込んで、支配下にある雌鶏たちを騒がせるのを許しません。雌鶏は、農村の人々にとってさながら、薪・米・油・塩と言った生活必需品の保管庫のようなもので、卵は売って現金収入を得ることが出来るし、からだの栄養補給源にもなります。雛を育てて、次代の鶏をもたらしませます。しかも雛を育て慈しむ姿は、人間の母親そっくりです。

ですから、高鳳蓮が剪る雌鶏は、愛情に満ち、ふくよかで、元気いっぱい、誇らしげな姿をしています。時には、雌鶏の尾の部分に子どもを剪り添えて、雌鶏が自分の子供と同じように大事なものだとして示しています(ページ下図左)。

農家の暮らしに、犬は欠かせないものです。彼らは農家の忠実な番人であり、家屋敷の守護神のようにふるまいます。良く見知った人には尾を振り、頭を下げて足元にすり寄って来ますが、見知らぬ人を見ると歯をむき出して吠え立て、飛び掛からんばかりに跳ね回ります。また、食べるものは何でも好き嫌い無く食べ、暑さ寒さにもよく耐え、24時間交代要員を必要としない衛兵の役割を果たします(下図右)。

高鳳蓮の剪り出す犬は、顔こそ怖そうな表情をしていますが、模様はのどかでかわいらしいので、鶏、猫、ウサギなどと同様に家族のような親しみを覚えます。高鳳蓮の剪紙の中の羊・兎・牛・ロバ・猪などは皆表情が生き生きとして魅力たっぷりで、作者の人間性が溢れんばかりです。



雄鶏



母鶏と雛



雌鶏



門番をする犬



腹這いの牛



仔牛

ものなく、空を自由に駆け回り、風を呼び、雨を降らせる力を備え、瑞雲に囲まれて、瑞兆である鳳凰やカササギを護る役目をするのだそうです。人間は、竜に最高の敬意を払い、毎年、天候の安定、家内平安、子孫繁栄を祈り、又、国家の安泰と民生の安定、

牛は、村人にとって大きな財産で、この地方では、「牛は、神様が人類を助けるために遣わして下さった有益な助手だ」と言われています。高鳳蓮の鋏が剪る牛は、無邪気で可愛らしく、忍耐強く従順で、人間の話をよく理解し、主人の意のままになります。のんびりと休んでいる牛、地面に腹這いになる牛、背中の小鳥が角の間の虫を啄もうとしている図など、慣れ親しんだ牛の様子が剪紙の上に剪り出されています。

牛のお腹の中では、子供が2匹の子犬と戯れている剪紙があります(上図左)。この画面の左上には蠅を追い払うように尻尾が振り上げられていて、右側の角と対比して画面のバランスをとっています。又別の剪紙(上図右)では、小牛が散歩しながらのんびりと草を食んでおり、子牛のしっぽの上では小鳥が無賃乗車を決め込んでいて、見る人の微笑みを誘います。どの図も、夫々に物語を語りかけていながら、画面の構成は充実してバランスが取れています。

民間伝説によれば、竜は天界の王で、世に並ぶ

経済の発展を祈ります。

また、陝北地域の人々にとって虎のイメージは、親しみ易く、やんちゃな感じで、虎のどう猛さなどない、まるで家で飼っている猫のようです。陝北地域では、虎はとつとつに絶滅してしまい、人々は老人たちの話を聞いたり、先人たちが残した図柄を見たり、猫の写真をもとに描かれた虎から想像するばかりです。高鳳蓮の剪る虎は、生き生きと活気に満ちていますが、表現は簡潔です。紙面からは、小さな虎が今にも躍り出て来るようで、出てきたら、一緒に遊びたくなる雰囲気です。

艾虎と言うのは、ヨモギで作ったトラの形をした魔除けです。本来は、端午の節句に子供の頭につけて邪気を払うのに使うものですが、今では可愛らしい



艾虎

トラのおもちゃになっています。高鳳蓮の艾虎は、地上に伏せて、頭を下げ、空を見上げ、炯炯と目を光らせて周りを注意深く伺っているようです。この艾虎はお腹を空かしており、母トラのお乳を求める鳴き声が剪紙から聞こえてくるようです。



龍

右図は、成年の花模様の虎です。首を絶えず動かして、油断なく辺りを伺っているようで、後ろ足は跳ね上げられて、何時でも走り出す姿勢をとっているため、飛虎と呼ばれます。



花模様の虎

虎が兎を捕まえる下図の作品は、狩の図であって、遊びではないと言いながら、虎は兎と戯れ、駆けっこをし、虎の尾の上にはもう一羽の兎さえも見えます。



虎が兎を捕まえる生殖崇拜の図は巫術文化の名残だ

生まれ年を表す干支は、古代黄帝の時代に「地支」と言われた十二支にその源があり、白羊・金牛・双子・カニなど十二星座に関連しています。ごく早い時期には、十二支、十二星座は共に、毎年十二か月の気候、農作物の状態、季節を表していました。それが、十二の動物が十二支に代わって十二の月を表すようになったと言われます。干支の十二支を使って生まれ年を表すことは東漢の時から始まったようです。

何故十二種類の動物をマークとして選定したかは、最も早い時期の部落のトーテムと関係があるようです。古代、各部落は自分たちが特別に恐れる動物、或いは逆に愛着を感じる動物を選んでそれをトーテムとして各部落のマークとし、崇拝の対

象としたのでした。

また、ある学者は、十二支が先ず時間を区別するために出現したと指摘します。古代には、一日24時間を12刻に分けました。そして彼らは、時刻を観察しながら、十二種の動物の生活習慣と照らして、十二支を確定しました。それをざっと眺めみると、昔の人達の、動物に対する認識を知ることが出来て、興味深いものがあります。

深夜11時から翌日の1時までは子の刻ですが、人間が寝静まったこの時間に活発な活動をするネズミをこの時間に当て、“子鼠”としました。次の1時から3時までは、丑の刻です。牛は夜中のこんな時間に草を食べる習慣があるので、農家の人々は深夜に起きて牛に餌をやりませす。そしてこの時間は“丑牛”としました。

3時から5時は寅の刻です。この時間は夜行性の虎が最も狂暴になる時間で、人々は虎の唸り声を聴くことがよくありました。それで“寅虎”となりました。日の出頃の早朝、5時から7時は卯の刻です。空が明るくなると、兎は巣から飛び出して、朝露に濡れた青草を好んで食べます。それで、この時刻は、“卯兎”となりました。

早朝7時から9時は、辰の刻です。この時間はよく霧が出るので、人々は伝説の竜が霧の中、雲に乗って戯れているところを連想し、又朝日が東から昇り、時時刻刻高くなるのを喜んで、“辰竜”としました。午前9時から11時までは巳の刻で、霧も晴れて、うららかに太陽が昇るこの時間は、蛇の類も巣から出て食糧を漁るので、“巳蛇”となりました。

お昼、11時から1時は午の刻です。大昔、野生の馬が人々に飼ならされる前には、毎日、昼頃になるとあちこちを駆けまわり、いなないていたため、“午馬”と名付けました。午後1時から3時は未の刻で、羊を牧草地に放すのに丁度いい時刻なので、“未羊”と言い慣わしました。

午後3時から5時までは申の刻です。太陽が西に傾くこの時刻、猿はよく鳴き交わすので、“申猿”としました。午後5時から7時は、酉の刻で、太陽